

松下幸之助記念財団 研究助成
研究報告

【氏名】 地田 徹朗

【所属】(助成決定時) 東京大学大学院総合文化研究科博士課程

【研究題目】

フルシチョフ時代以降ソ連における「自然改造」とインノケンチ・ゲラシモフの構築地理学理論

【研究の目的】

本研究では、フルシチョフ時代以降のソ連地理学の動向、中でも、インノケンチ・ゲラシモフ・ソ連科学アカデミー地理学研究所長を中心とした地理学者たちによる「自然改造」理念について、その通時的な内容の変遷に着目して明らかにすることを目的とした。中でも、「自然改造」理念を地理学の一つの理論として精緻化させたゲラシモフによる「構築地理学」理論に着目した。戦後スターリン時代については、すでに申請者による論考(「多民族領域帝国ソ連における地域・空間認識:戦後スターリン期を中心に」『地域研究』第10巻第2号、2010年、109-130頁)が存在するため、その後の時期について、「自然改造」理念がどのように変容していったのか、そして、それがソ連領中央アジアのアラル海流域圏、イリ・バルハシ流域圏での水利開発にどのような影響をもったのか、この点についても明らかにすることも目指した。「自然改造」理念と開発の問題は、現在進行形の中央アジアの環境問題や水・エネルギー問題を考える上でも極めて重要である。

【研究の内容・方法】

本研究は、ソ連史・地理学史のディシプリンによる研究であり、一次資料に基づいた歴史学的な手法を用いた。具体的には、ソ連時代の地理学雑誌及び文献の収集・分析、ソ連時代の公文書(アーカイブ)資料の収集・分析を中心に行った。

研究内容については以下のとおりである。スターリンの死後、「自然改造」も一時的に下火になるが、1960年にソ連科学アカデミー地理学研究所及びその所長のインノケンチ・ゲラシモフを中心としてこの理念を復活させている。しかし、理念の中身には重大な改変が加えられた。従来の、自然環境は人間に対してより多くの収穫や気候の緩和をもたらすという正の関係性のみを想定した「自然改造」理念から、人間の力が作用する自然環境からの負のフィードバックを考慮した上で計画的な「自然改造」を行うべきと改められた。これをゲラシモフは「自然システムのサイバネティクス化」と呼んだ。人間による自然改造というインプットと、そこから生じる農業生産増や環境負荷というアウトプット、さらには、それがいかに環境や人間生活に跳ね返ってくるかというフィードバック、これら全てを想定した自然改造の学の創出をゲラシモフは訴えた。そして、1966年、ゲラシモフらによる自然改造理念は、最終的に「構築地理学」として理論化される。そこでは、計画的な自然改造、合理的な産業配置、人口移動の法則性の解明と理想的な居住地の開発を三位一体で研究し、従来の「記述の学」としての地理学から「構築の学」へと脱皮することが構想された。これは欧米や日本での応用地理学に近い。アラル海流域圏での水資源問題も、この三位一体型のアプローチ—貯水湖や運河の建設、綿作・稲作への専門化・分業化、中央アジアでの人口増による余剰労働力の活用—から理解されるようになる。1970年代には、エコロジーの発想から、開発と環境保護をいかに両立させてゆくかという論点も出てくる。計画的な「自然改造」を行う上での社会主義体制の優位性についての主張に揺るぎはないが、過去のオプティミズムは影を潜め、環境問題に対してより慎重なアプローチがとられるようになる。

【結論・考察】

「構築地理学」に代表されるように、フルシチョフ時代以降の「自然改造」理念は、このように重大な変化を遂げた。むやみやたらに、開発や「自然改造」を行えばいいというわけではなく、経済的・科学的裏づけに基づいて「自然改造」を行うべきとされた。そして、ブレジネフ時代になると、このような裏づけなき開発プロジェクトに安易な政治的エンドースも与えられにくくなる。実際に、バルハシ湖の縮小と塩水化が懸念されたため、1960年代半ば以降、バルハシ湖に注ぐイリ川での大規模灌漑計画はソ連政府により拒絶された。ソ連における開発理念としての「自然改造」は大きな変化を遂げたが、総体としての人間そのものの能力、計画経済の全能性、科学技術革命の積極的意義に対する確信という点では一少なくとも表向きには一変化がなかった。アラル海問題に見られるように、理念と現実の齟齬が顕在化し、シベリア河川転流計画というさらなる「自然改造」による問題の解決策が拒否された時、社会主義イデオロギーは空洞化し、「帝国」ソ連の衰退もまた露わになった。